

自己の意識における地域の把握と 人と地域との心理的な結びつきに影響を与える 要因に関する考察

近石 さゆり¹・高橋 由弥²・齋藤 和希³・泊 尚志⁴

¹ 学生会員 東北工業大学大学院修士課程 工学研究科土木工学専攻 (仙台市太白区八木山香澄町 35-1)

E-mail: m214801@st.tohtech.ac.jp

² 非会員 株式会社東北構造社 技術部 (仙台市青葉区本町 二丁目 2 番 3 号 鹿島広業ビル)

E-mail: s1814134@st.tohtech.ac.jp

³ 非会員 元東北工業大学

⁴ 正会員 東北工業大学准教授 工学部都市マネジメント学科 (仙台市太白区八木山香澄町 35-1)

E-mail: tomari00@st.tohtech.ac.jp

本研究では、人と地域との心理的な結びつきに影響する要因や、回答者自身が内面的に結びついていると考える地域を把握することを試みた。その結果、回答者が心理的に結びついていると考える地域は現住所であることや、年代によって変容することが明らかとなった。また、地域について積極的に理解しようとする姿勢や知っているという実感は、人と地域との心理的な結びつきを高め、地域に対して距離感を感じていると地域への愛着が低減される可能性が示された。

Key Words: *self-consciousness of the community, psychological bonds between people and their communities, attitudes toward the community, place attachment*

1. はじめに

国土のグランドデザイン2050において、「『ふるさと』への思いは、日本の文化、国民性を支えることにもつながり、国際化の中で日本が生きていくうえでの強みになるものである。」と示されるなど、人と地域との心理的な結びつきに対する関心が高まっている¹⁾。例えば、人と地域との心理的な結びつきの1つであると考えられる地域愛着は、市民活動の持続可能性を高める効果があると指摘されている²⁾。

このように人と地域との心理的な結びつきが重要であるとされるが、実際には場所感覚や地域愛着、帰属意識等多様な概念で捉えられており、統一的な概念で示されていない。このことから、人と地域との心理的な結びつきを図る際は、一つの概念に限らず多様な概念が必要である。

人と地域との心理的な結びつきに関して、レルフ³⁾は深層的な意義への気づきと場所のアイデンティティへの

の理解が必要不可欠と述べており、WSを通じた理解の変容⁴⁾や、農山村整備事業を通じた住民意識の変容に着目した研究⁵⁾等からも地域に対する理解が重要であることがわかる。しかしその一方で、理解の内容や水準が十分であれば地域との心理的な結びつきが形成されるだろうか疑問が生じる。

また、人と地域との心理的な結びつきの形成に向けて、形成過程や影響関係の調査と共に心理的に結びつくような地域について考察されてきている⁶⁾。その場合、特定の地域か居住地、或いは回答者が「地元」「ふるさと」と思う地域が対象となっている。前者の場合、その地域を焦点とした調査のため問題ないが、後者の場合、誰に聞かれたかが対象地域の選択に影響している可能性が考えられ、心理的に結びつくような地域の把握が必ずしも適切ではないと考えられる。

以上の考えのもと、本研究では、人と地域との心理的な結びつきに影響する要因や、回答者自身が内面的に結びついていると考える地域を把握することを試みる。そ

こで、日本国内の住民を対象に、回答者が内面的に結びついていると考える地域、すなわち自己の意識における地域について実態を調査すると共に、先行研究を踏まえて、人と地域との心理的な結びつきを地域愛着と場所アイデンティティ、誇りとして調査し、心理的な結びつきに影響する要因として地域に対する理解の主体性や理解の認識、距離感等について分析する。以上により、人の地域との心理的な結びつきを形成する上で参考となりうる基礎的知見となることとしたい。

2. 本研究の仮説と目的

(1) 人と地域との心理的な結びつきに影響を及ぼす要因

人の地域との心理的な結びつきが多様な概念で構成されていることや、統一的な概念ではないことが指摘されている⁷⁾。人の地域との心理的な結びつきにおいて重視される概念の1つとして、人々と地域との精神的・情緒的な結びつきを表す地域愛着²⁾が挙げられる。地域愛着についてこれまで多くの知見が存在^{8) 9) 10)}しており、地域愛着が高い人ほど地域への活動に熱心であること¹¹⁾が指摘されていることから、人と地域との心理的な結びつきにおいて地域愛着は重要な要素であると考えられる。また、近年、地域再生や地域活性化の文脈において「アイデンティティ」が重視されている。これはローカル・アイデンティティ¹²⁾や地域アイデンティティ^{5) 13)}、場所アイデンティティ¹⁴⁾等様々な用語で表現されており、人と地域との心理的な結びつきと同様に複合的な概念であるが、本研究では状況に左右されない自己の意識における地域の把握を試みるため、自己アイデンティティの下部構造とされる場所アイデンティティ¹⁵⁾を人と地域との心理的な結びつきの要素として捉えることにする。さらに、地域に対する誇りも地域愛着と同様に地域活動への促進として重要な要素であることが明らかとなっている。例えば、地域活動への取り組み意識の醸成に地域の歴史・文化に対する「誇り」が影響することが指摘されている¹⁶⁾。以上の知見を踏まえた上で、本研究では市民が地域に対して誇りを感じていると、地域への愛着や自身を語る上で地域の存在がより重視されると想定し、人と地域との心理的な結びつきについて地域愛着、場所アイデンティティ、誇りの3点から考察するとともに、誇りが地域愛着と場所アイデンティティを高めるかどうかについても検討する。

次に、地域について知ることや認識を改めることは、人と地域との心理的な結びつきを形成する上で重要な過程であることが知見の中から示唆される^{4) 5)}。しかし、地域について理解した内容や程度そのものよりも、地域について理解したという実感や、「地域について知ら

い」という市民の地域に対する積極的な姿勢、すなわち地域に対する理解の主体性が背後で影響しているのではないだろうか。しかしながら、このような地域に対する理解の認識や理解の主体性から考察した論文は今のところ見つかっていない。

さらに、現在の居住地と、心理的に結びついていると思う地域との間に距離が生じている人もいと推察される。人と地域との心理的な結びつきが地域活動への参加を高めるとすると、参加しやすいと感じられる距離に地域が存在していることが望ましいと考えられる。一方で、物理的距離が近くても感覚的に距離を感じている場合、心理的に結びついていたとしても、徐々に心理的な結びつきが低減するかもしれない。以上を踏まえ、本研究では、地域に対する理解の主体性と理解の認識、当該地域に対する距離感が、人と地域との心理的な結びつきに影響を及ぼすかどうか検討する。

(2) 心理的に結びつきやすい地域の把握

心理的に結びつきやすい地域について把握することは、人と地域との心理的な結びつきの形成の検討の参考となる。たとえば「地元」「ふるさと」についてそれぞれインターネットで画像検索すると、地元については農村風景とともに都市部の写真も中には見受けられたが、ふるさとの場合は農村風景の写真が大半を占めている。地元意識に関する調査では、地元に有する条件として親族がいる地域やお墓がある地域、出生地が多いことが明らかとなっている⁶⁾。このことは、心理的に結びついている地域の把握において、「地元」或いは「ふるさと」と表現される場合があるが、表現によって連想する地域がある程度限定されてしまっていることが考えられる。また、「地元」と表現し質問された場合、質問者がどんな人物なのかによって回答する地域を変えることが推察される。

以上を踏まえると、地域の把握において、質問者の性質や状況、表現による選択の偏りといった外部からの影響を受けないように調査することが課題となる。

(3) 本研究の仮説と目的

以上を踏まえて、本研究では次の仮説を構築する。

まず、地域に対する誇りは地域愛着や場所アイデンティティを高めると考える。次に、地域に対する理解の主体性、理解の認識は、人と地域との心理的な結びつきを高め、地域に対する距離感や人と地域との心理的な結びつきを低減すると考える。そのうち、「自分は地域を知っている」と実感しているからといって、その地域に対して変わってほしくないといった願いを持つことが想定しにくいことから、地域に対する理解の認識と地域愛着(持続願望)は影響しないと考えられる。以上の仮説を図示すると、図-1のとおりとなる。

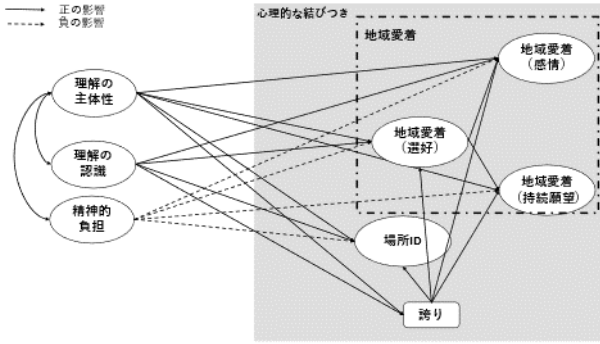


図-1 本研究の仮説の関係

本研究の目的を改めて論じると次の2つである。

- 1) 質問者の性質や状況によらず、回答者自身が結びついていると感じている自己の意識における地域の概念的認識と空間的認識について把握を試みる。
- 2) 自己の意識における地域を把握した上で、地域に対する理解の主体性や理解の認識、距離感と人と地域との心理的な結びつきとの関係性について、図-1の仮説を検討する。

3. 調査

(1) 調査概要

2021年1月に全国の20歳以上の男女を対象にwebアンケートを実施した。配信数は5778件、回収数は1097件であり、回収率は18.9%であった。なお、配信先は、日本の年齢別性別人口に基づいて構成した

(2) 調査項目

本研究において分析に使用した調査項目を表-1、回答者の主な個人属性について表-2に示す。なお、調査では自己の意識における地域を「自分を最もよく表す地域」と表現して質問した。

人と地域との心理的な結びつきに関する項目について、「地域愛着」については、藤井ら¹¹⁾で用いられた質問項目を用いた。「場所アイデンティティ」はJorgensenら¹⁴⁾を参考に項目を設定した。「誇り」は西口ら¹⁷⁾を参考に項目を設定した。いずれの項目も5件法で回答してもらった。

次に、「地域に対する理解の主体性」「地域に対する理解の認識」「地域に対する距離感」に関して、本研究独自の項目を設定し、いずれの項目も5件法で回答してもらった。

さらに、自己の意識における地域の概念・空間的認識の把握のために、自己の意識における地域の名前を訪ねると共に、「自己の意識における地域の条件」と「自己の意識における地域の空間的認識」について質問した。

表-1 調査項目表-1 調査項目

「人と地域との心理的な結びつき」に関する項目
「地域愛着」
地域愛着 (感情) ($\alpha=0.91$)
住みやずいと思う
お気に入りの場所がある
歩くのは持ちやすい
雰囲気や土地を気に入っている
好きだ
リラックスできる
地域愛着 (嗜好) ($\alpha=0.93$)
大切だと思う
愛着を感じている
自分の居場所があると感じている
自分の街だという感じがする
ずっと住み続けたい
地域愛着 (持続願望) ($\alpha=0.87$)
いつまでも変わってほしくないものがある
なくなってしまうと悲しいものがある
「場所アイデンティティ」($\alpha=0.89$)
離れているとしてもその地域の人間だと思う
私らしくいられると思う
私を表していると思う
「地域に対する誇り」
誇らしいと思う
(それぞれその地域について、当てはまるものを「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答)
「地域に対する理解の主体性」に関する項目($\alpha=0.85$)
その地域について知っていたいと思う
その地域の最新の情報を調べておきたいと思う
その地域の情報に自らアクセスする方だ
近い存在に感じる
(それぞれその地域について、当てはまるものを「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答)
「地域に対する理解の認識」に関する項目($\alpha=0.87$)
概ねよく知っていると思う
他の人に説明できると思う
(それぞれその地域について、当てはまるものを「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答)
「地域に対する距離感」に関する項目($\alpha=0.88$)
その地域に行こうとすると時間がかかるように感じる
その地域に行くためのお金は負担に感じる
その地域とあなたとの距離は長く感じる
(それぞれその地域について、当てはまるものを「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答)
「自己の意識における地域」の概念・空間的認識に関する項目
自己の意識における地域: 「あなたのことを最もよく表す地域の名前を教えてください。(市・区以下の住所のご記入はされないようご注意ください)」という質問に対して自由記述回答してもらった。
自己の意識における地域の条件: 生まれ育った場所だから/自分にとって思い深い場所だから/家族や親族がいる場所だから/現在住んでいる場所だから/お墓がある場所だから/その他(自由記述)
(複数選択可)
自己の意識における地域の空間的認識: 市区町村/都道府県/地方/国/特にない・分からない/その他
(複数選択可)
自己の意識における地域での居住経験に関する項目
住み始めた年齢
居住年数
居住形態: 持ち家(戸建て)/持ち家(集合住宅)/借家(集合住宅)/寮, 社宅/その他

表-2 回答者の主な個人属性

サンプル数: 1097
性別: 男性527名/女性570名
年齢: 20代135名/30代141名/40代185名/50代178名/60代以上458名
転居回数: 平均3.5回
現住所(地方): 北海道52名/東北地方46件/関東432名/中部地方169名/近畿地方218名/中国地方70名/四国地方27名/九州地方83名

「自己の意識における地域の条件」は関口ら⁶⁾が示した地元の概念的認識の5類型を参考に7項目設定し、複数選択可能とした。「自己の意識における地域の空間的認識」に関して、市区町村、都道府県、地方、国、特にない・分からない、その他を項目として設定した。調査の都合によりプライバシー保護の観点から市区以下の回答ができないことから、自己の意識における地域を市区よりも詳細な地域名で認識している場合は空欄のままにしてもらった。

最後に、自己の意識における地域での居住に関する項目として、住み始めた年齢、居住年数、居住形態について質問した。なお、自己の意識における地域を現住所と選択した場合、現住所に住み始めた年齢、年数、居住形態をそのまま用いることとした。

(4) 分析対象

回収数 1097 件のうち、自己の意識における地域の有無について、「特にない・分からない」という回答が 181 件あり、全体の 85.3%は自身と結びついていると感じている地域が存在することが明らかとなった。これ以後の分析では、自己の意識における地域があると回答した 916 件を対象とする。

4. 自己の意識における地域の概念・空間的認識

(1) 自己の意識における地域の概念的認識

自己の意識における地域の選択理由について図-2 に示す。なお、複数選択可としたため、各項目に対する回答数の合計は 916 件よりも多くなっている。図-2 より、「現在住んでいる場所」の回答が最も多く（39%）、「生まれ育った場所」（25%）、「家族や親族がいる場所」（14%）が続く形となった。このことは、回答者自身の中で自身と結びついていると感じている地域は、従来議論されている「地元」「ふるさと」から連想されるような、必ずしも出生地や親族がいる地域ではないことを意味すると考えられる。また、家族・親族と友人で比較した場合、友人よりも家族・親族を選ぶ方が多く、親戚関係が自己の意識における地域の選択に影響している可能性が見受けられた。

次に、年齢による価値観の違いから概念的認識に違いがあると想定し、自己の意識における地域の選択理由と年代の関係性について分析した（図-3）。その結果、年代があがるにつれて、「現在住んでいる場所」を選択する割合が高くなる傾向がみられた。わずかであるが「お墓がある場所」の回答割合も年代が上がるにつれて高くなっている。また、20代は「自分にとって思い出深い場所」が他の年代と比べて割合が高くなっている。このことから、年代によって自身と結びついていると感じている地域が変容していくことが示唆される。

(2) 自己の意識における地域の空間的認識

自己の意識における地域の空間的認識の集計結果を図-4 に示す。大半の人が「市区町村」レベルで認識しており、「都道府県」「地方」がそれに続いている。これは、「地元」に対する空間的認識と同様である。

次に、転居回数が多いと空間的認識が広がるものと想定し、自己の意識における地域の空間的認識と転居回数

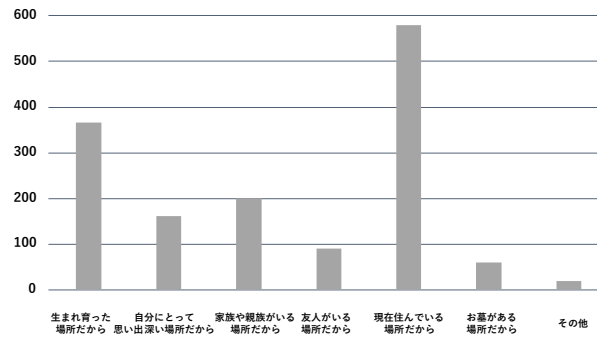


図-2 地域選択理由

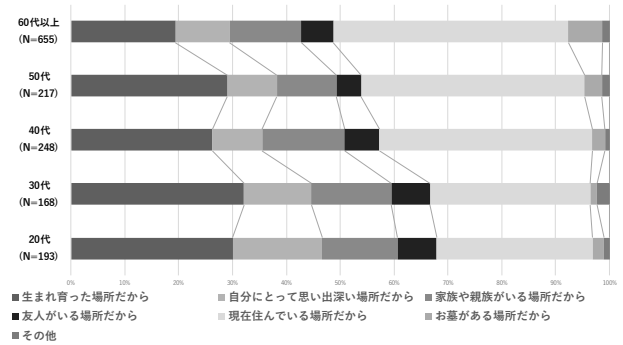


図-3 年代別地域選択理由

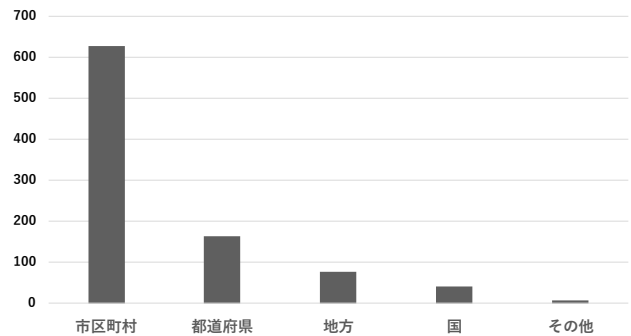


図 4 自己の意識における地域の空間的認識

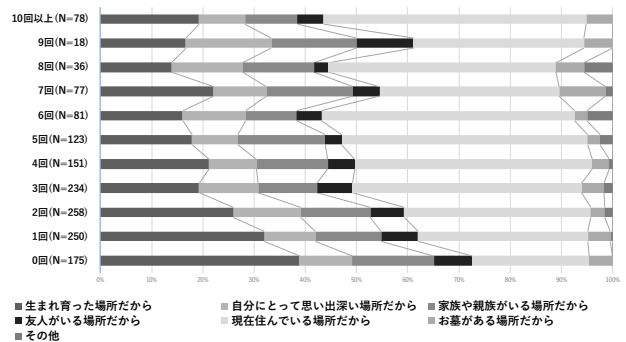


図 5 転居回数別地域の空間的認識

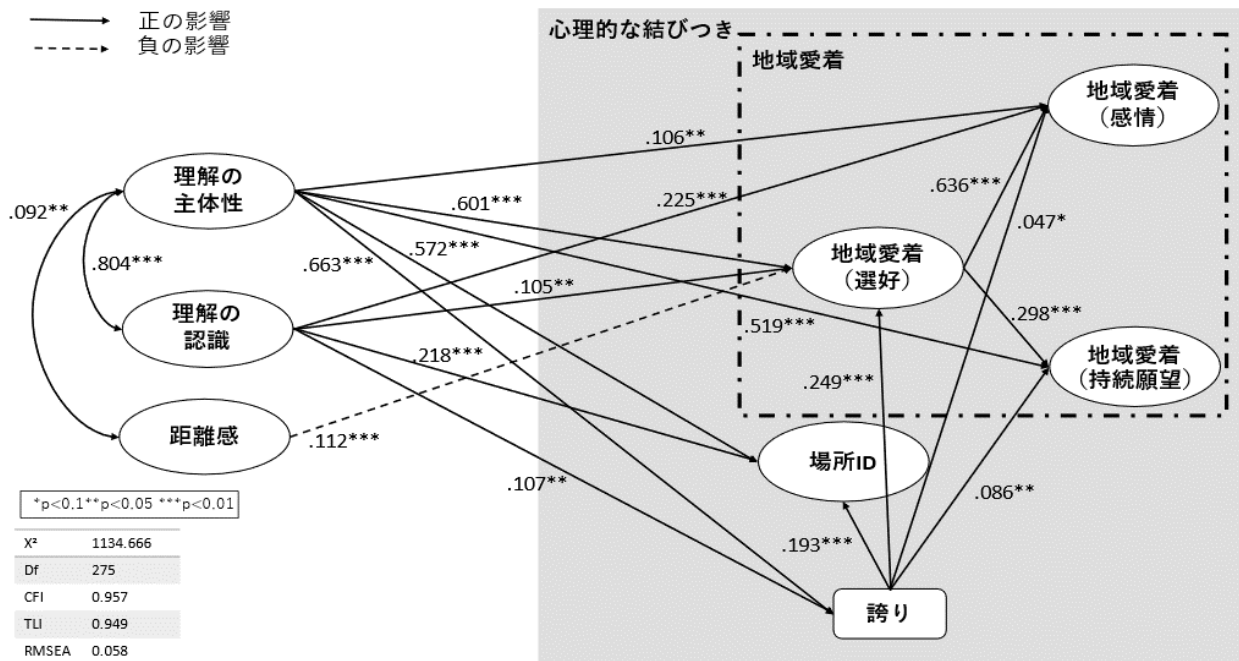


図6 共分散構造分析の結果

の関係性を分析した(図-5)。独立性の検定を行ったが有意差は認められなかった($df=50$, $\chi^2=63.7$, $p>0.05$)。転居回数が増えるにつれて、「都道府県」を選択する割合が増えているが、今回の回答者においては、転居回数と空間的認識に差異がないことが示唆された。

5. 理解の主体性、理解の認識、距離感が人と地域との心理的な結びつきに与える影響

共分散構造分析を用いて、2章で構築した仮説の検証を行った。複数の調査項目によって構成される尺度は、信頼性係数が0.70以上を示したことから、十分な信頼性を持つと判断し分析を行った結果を図-6に示す。

(1) 人と地域との心理的な結びつきの構成要素間の検証

地域愛着(選好)は、地域愛着(感情)と地域愛着(持続願望)に影響を及ぼす関係がみられ、先行研究と同様の結果となった。地域に対する誇りは、地域愛着(選好)、地域愛着(感情)、地域愛着(持続願望)、場所アイデンティティに影響を及ぼす関係がみられた。このことから、地域に対して誇りを持っていることが、地域への愛着や自身を語る上で重要な要素であることが示唆された。

(2) 地域に対する理解の主体性、理解の認識、距離感の関係性の検証

地域に対する理解の主体性と理解の認識、および地域

に対する理解の主体性と距離感がそれぞれ相関をもつことと、地域に対する理解が人と地域との心理的な結びつきの構成要素全てに影響を及ぼし、理解の認識が地域愛着(選好)と地域愛着(感情)、場所アイデンティティ、誇りに影響を及ぼし、さらに距離感が地域愛着(選好)のみに影響を及ぼす関係が示されたことから、本研究の仮説は一部支持された。

また、地域愛着(選好)と場所アイデンティティ、誇りは、地域に対する理解の主体性が最も強く影響を及ぼす関係となっている。地域愛着(感情)は、地域に対する理解の主体性と理解の認識による直接的な影響や、誇りを介した間接的な影響よりも、地域愛着(選好)を介した間接的な影響が最も強くなっている。地域愛着(持続願望)は、地域に対する理解の主体性による直接的な影響や、地域愛着(選好)を介した間接的な影響よりも誇りを介した間接的な影響が最も強くなっている。

このことから、「地域について知ってみたい」という地域に対する積極的な態度は、地域愛着や地域に対する誇り、場所アイデンティティを形成する上で特に重要な要素であると考えられる。

6. 結論

本研究では、自己の意識における地域の概念的・空間的認識と、地域に対する理解の主体性、理解の認識、距離感が人と地域との心理的な結びつきに与える影響の把握を行った。

はじめに、自己の意識における地域の概念的認識は、

現在の居住地と捉えている場合が多く、これは従来議論されている地元意識やふるさと意識として選択される地域とは異なる結果となった。また、年代との関係性をみた結果、年代によって自身と結びついていると考える地域が変容していくことが示唆された。このことから、人の地域との心理的な結びつきの形成にかかわる事業において、類型や傾向に応じた対策を講じる必要があると考える。さらに自己の意識における地域の空間的認識は、従来議論されている地元意識やふるさと意識の場合と同様の範囲を認識していることが確認された。

次に、地域に対する理解の主体性、理解の認識、距離感が人の地域との心理的な結びつきに与える影響について、地域に対する理解の主体性、理解の認識、距離感はいずれも心理的な結びつきに影響を与えるという結果が得られた。また、地域に対する誇りは場所アイデンティティと地域愛着に影響を与えており、人と地域との心理的な結びつきの構成要素間の関係が見受けられた。このことから、「地域について知りたい」という意識や、あるいは「自分は地域について知っている」という実感を生み出すことが、地域への愛着や地域に対する誇りといった地域との心理的な結びつきを形成することことが期待される。また、地域に対する距離感があると地域への愛着を低減させる可能性が見受けられたことから、地域づくりの観点として地域に対して距離感を感じている人に対応した政策の検討が必要である。

今後の課題として、まず「自分を最もよく表す地域」の地名の回答に対して、ごくわずかであるが「よく分からない」といった回答がみられたことや、(現在の)自分を最もよく表す地域として選択したのか、(これまでの)自分を最もよく表す地域として回答したのかは把握できないことから、調査における表現の改善が必要である。

参考文献

- 1) 国土交通省：国土のグランドデザイン2050～滞留促進型国土の形成～（更新日：2014年7月4日）
<https://www.mlit.go.jp/common/001047113.pdf>.
- 2) 羽鳥 剛史, 片岡 由香, 尾崎 誠：市民活動の持続可能性に関する心理要因分析, 土木学会論文集 D3 (土木計画学), 72 卷 (2016) 5 号.
- 3) エドワード・レルフ (著), 高野武彦, 石川美也子, 阿部隆 (訳)：場所の現象学 没場所性を超えて, 筑摩書房, 1999.
- 4) 山本美保里：市民活動の持続可能性に関する心理要因分析による場所への働きかけの意味に関する考察, 景観・

デザイン研究講演集, No. 16, 2020 年 12 月.

- 5) 重岡 徹, 山本 徳司, 栗田 英治, 木下 貴裕：農業農村整備事業の導入に伴う地域アイデンティティの再醸成機能に関する考察, 農業農村工学会誌, 78 卷 (2010) 9 号.
- 6) 関口達也・林直樹・杉野弘明・寺田悠希：人々の「地元」に対する概念的・空間的認識の多様性-地域のまちづくりへの活用に向けた定量的解析-, 農村計画学誌, vol. 35, 2017 年.
- 7) 城月雅大, 園田美保, 大槻知史, 呉宣児：「まちづくり心理学」の創出に向けた基礎理論の構築：計画論と環境心理学の橋渡しによる地域再生のために, 名古屋外国語大学現代国際学部紀要, 第 9 号, 2013.
- 8) 大谷 華：場所と個人の情緒的なつながり 場所愛着, 場所アイデンティティ, 場所感覚, 環境心理学研究, 1 卷 (2013) 1 号.
- 9) 鈴木 春菜, 藤井 聡：「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究, 土木学会論文集 D, 64 卷, 2 号, 2008.
- 10) 引地 博之・青木 俊明：地域に対する愛着形成の心理過程の検討, 景観・デザイン研究講演集, No. 1, 2005 年 12 月.
- 11) 鈴木 春菜, 藤井 聡：地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究, 土木計画学研究・論文集, 25 卷, 2008.
- 12) 大堀研：ローカル・アイデンティティの複合性：概念の使用法に関する検討(特集)地方産業都市の興隆と安定：希望学・釜石調査からの考察, 社会科学研究 61(5・6), 143-158, 2010.
- 13) 鄭 蝦榮, 松島 格也, 小林 潔司：アイデンティティと過疎中山間地域におけるおつきあい行動一日南町を事例にー, 土木学会論文集 D3 (土木計画学), 68 卷 (2015) 5 号.
- 14) Bradley S. Jorgensen (2001), Sense of Place as an attitude: Lakeshore owners attitude towards their properties Journal of Environmental Psychology・September 2001
- 15) 城月雅大 (2018)：まちづくり心理学, 名古屋外国語大学出版会.
- 16) 芝池 綾, 谷口 守, 松中 亮治：意識調査に基づくソーシャル・キャピタル形成の構造分析, 都市計画論文集, 43.3 卷 (2007)
- 17) 西上広貴・上月康則・山中亮一・小野薫・平川倫 (2017)：ふるさとのために活動する学生の特質について～「愛着」「誇り」「避けたい」感情に着目して～, 景観・デザイン研究講演集, No. 13.